Vol.55 / Spring 2015

LITTERAE POPULI

北海道大学の今を伝える広報誌、リテラポプリ

http://www.hokudai.ac.jp/pr/

北海道大学

発　行：北海道大学 総務企画部広報課
〒060-0808 札幌市北区北８条西５丁目
Tel: 011-706-2902 Fax: 011-706-2092
E-mail: kouhou@jimu.hokudai.ac.jp



撮影場所／中央ローン

特集

広がり、拡がる、そして育てる。

教育の場は、社会に飛び出し、世界に広がり、人や社会とのつながりを広げ、キャンパスを超え発展していく。
特集では「スーパーグローバル大学創成支援&北海道大学近未来戦略150」「双方向遠隔授業」「アグリフードセンター」について紹介し、教育の場の広がりについてお伝えする。

撮影場所／総合博物館

北海道大学の今を伝える



Litterae Populi

『リテラポプリ』は、北海道大学の“今”を伝える広報誌として、年2回発行します。題名の“Litterae Populi”はラテン語で「ポプラの手紙」を意味します。

目　次

03 特集 広がり、拡がる、そして育てる。
04 スーパーグローバル大学創成支援 & 北海道大学近未来戦略150
10 双方向遠隔授業
12 アグリフードセンター［北方生物圏フィールド科学センター 耕地圏ステーション 生物生産研究農場］

14 対談「フロンティアスピリットを訊く」
トヨタ自動車株式会社 代表取締役副社長
加藤 光久

20 研究室訪問「研ぐ」
大学院情報科学研究科
メディアネットワーク専攻 メディアダイナミクス研究室 教授
長谷山 美紀

22 卒業生インタビュー「同窓異曲」
信濃川ウォーターシャトル株式会社 代表取締役社長
栗原 道平

24 海外オフィス便り
フィンランド ヘルシンキオフィス／副所長 サロマ，テロ
韓国 ソウルオフィス／所長 車 柱栄

26 歴史紹介「挑戦の140年」

28 トピックス

30 キャンパス風景

リテラポプリ 55号　2015年3月発行

編集／リテラポプリ企画編集チーム
三上 隆（理事・副学長）
西口 規彦（工学研究院）
村松 正隆（文学研究科）
菅原 広剛（情報科学研究科）
岡本 博史（農学研究院）
鍋島 孝子（メディア・コミュニケーション研究院）
井上 高聡（大学文書館）
田中 奈緒美（広報課）
カバーフォト／山本 顕史（ハレバレシャシン）
写真／古瀬 桂（ゲイズフォトグラフィカ）
制作／株式会社オブジェクティフ
印刷／株式会社アイワード

特集

広がり、
拡がる、
そして育てる。

Stage 1 世界

スーパーグローバル大学創成支援
&
北海道大学近未来戦略150

世界をキャンパスにする。

北海道大学は、
平成26年度
スーパーグローバル大学等事業
「スーパーグローバル大学創成支援」
タイプAに採択された。
課題解決に向けて協働する
世界のあらゆる場所を
本学のキャンパスにするという
構想のもと、
世界の課題解決に貢献する
大学の実現を目指す。



世界に開かれ、世界と協働。

世界とつながる、そのための改革。



サマー・インスティテュートでは、冷涼で美しい夏の北海道に世界のトップ研究者や産業界リーダー、学生が集う。

スーパーグローバル大学創成支援

TOP GLOBAL UNIVERSITY JAPAN



北海道大学総長
山口 佳三

２０１４年９月、文部科学省が公募した「スーパーグローバル大学創成支援」タイプAに、本学が提案した構想「Ｈｏｋｋａｉｄｏ ユニバーサルキャンパス・イニシアチブ～世界に開かれ世界と協働～」が採択された。

この事業は、海外大学との連携や大学改革により徹底した国際化を進める世界レベルの教育研究を行う大学や、国際化を牽引する大学に対し、重点支援を行うものである。実施期間は最大10年。そのうち「タイプA」は、世界大学ランキングトップ１００を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学を対象としたものであり、本学を含む13大学が選ばれた。

「ちょうど１年ほど前になりますが、本学が創基１５０年を迎える２０２６年までの改革戦略を『北海道大学近未来戦略１５０』としてまとめました。採択された構想は、この近未来戦略１５０を具現化するプログラムと位置づけられるものであり、複数の事業で構成される全学的な改革の取り組みです」と、山口佳三総長はその全体像を語る。

構想の骨格を成す「1-4-4改革プラン」。

本構想では、「１-４-４改革プラン」と称し、総長のガバナンスのもとで４つの教育改革プランと、４つのシステム改革プランを推進していく。

４つの教育改革とは、「ＮＩＴＯＢＥ教育システムの確立」「国際大学院群の新設」「ラーニング・サテライトの開設」「サマー・インスティテュートの展開」である。

「ＮＩＴＯＢＥ教育システムの確立」は、２０１３年度に創設した「新渡戸カレッジ」のさらなる充実と、大学院生を対象とする「新渡戸スクール」の開設が中核となる。「新渡戸カレッジ」とは、グローバル社会で活躍できるリーダーを育成するための学部横断型特別教育プログラムである。原則１セメスター以上の海外留学や実践的な英語科目、多文化交流科目、新渡戸学など充実したカリキュラムを展開するほか、グローバルに活躍する本学の同窓生がフェローとしてカレッジ生のキャリアデザインを支援する。これを発展させるかたちで２０１５年度に新たに開設する「新渡戸スクール」では、課題解決型学習やポートフォリオの活用などにより、高度な専門性を基盤にイノベーションと社会変革をリードできる真の国際人の育成を目指す。

「国際大学院群の新設」は、本学が特に強みを持つ領域をさらに強化し、世界の課題解決に貢献できる専門的グローバル人材を育成することが狙いだ。第一歩として、２０１４年４月に総長直轄の組織「国際連携研究教育局（ＧＩ-ＣｏＲＥ）」を立ち上げ、スタンフォード大学、メルボルン大学、アイルランド国立大学ダブリン校、アブドラ国王科学技術大学から世界トップレベルの研究者をユニット単位で誘致し、最先端の国際連携研究に取り組んでいる。こうした実績を礎に、２０１７年度には３つの国際大学院（医理工学院、国際感染症学院、国際食資源学院）を開設する準備が進められている。

「ラーニング・サテライトの開設」と「サマー・インスティテュートの展開」は、対の関係になるものである。海外オフィスを拠点として本学の教育を海外で展開するラーニング・サテライトは、海外の大学と連携し、10年後には年間60科目を開講する予定だ。

一方のサマー・インスティテュートは、海外の大学の夏休みと重なる第２学期に、世界のトップ研究者や産業界のリーダーを本学に招き、本学の研究者と協力して教育を行うものであり、10年後には招へい者１００名、３００科目の開講を予定している。

「これらの取り組みを通じた海外研究者との交流が、新たな共同研究や組織的な連携につながることも期待しています」と山口総長。





同窓生と協働、北海道大学コミュニティを形成。

４つの教育改革を実現するため、４つのシステム改革を実施する。４学期制や国際標準の成績評価制度（ＧＰＡ）導入、シラバスの１００％英語化など、教育の国際スタンダード化を盛り込んだ「教学マネジメント体制の整備」、優秀な研究者を雇用するためのダブル・アポイントメント制度や年俸制導入などの「人事制度の国際化」、教職員の能力開発のための研修実施などによる「国際対応力の強化」、そして「国際広報力の強化」を掲げている。

「国際広報力の強化については、外国語による教育研究情報の発信力を強化するとともに、本学を応援してくださる方々との緊密なネットワーク〝北海道大学コミュニティ〟の確立を目指しています。具体的には、国際的に活躍する同窓生を北大アンバサダー、パートナーとして委嘱し、海外での教育や情報発信をサポートしていただきます。また、各地域で中心的な役割を担っていただくアンバサダーの方々には、海外同窓会の拡充や組織化の推進もお願いしたいと考えています」と、同窓生との協働に力を込める山口総長。

国際競争力を向上させ、国際社会に貢献。

本構想は、どのように国際的評価を向上させていくのか。山口総長はそのプランを語る。

「４つの教育改革の取り組みを通して本学の教育力および研究力の向上を図り、世界大学ランキングの順位向上につなげます。最初の５年間は、国際共同研究を奨励・促進し、評判スコアと国際共著論文数の増加を目指します。後半の５年間は、前半で芽を出した国際共同研究を発展させ新たな強み領域へと成長させると同時に、国際社会に貢献する北海道大学をアピールしていきます」。

世界とつながり、ここから、新たな協働体制が生まれる。

世界の課題解決に貢献する。

北海道大学
近未来戦略150
FUTURE STRATEGY FOR THE 150TH ANNIVERSARY OF HOKKAIDO UNIVERSITY



北海道大学は、１８７６年（明治９年）、明治初期に最も早く設立された高等教育機関のひとつである札幌農学校を起源とする。開学以来、「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」という４つの基本理念を建学の精神として掲げ、培ってきた。

この基本理念を踏まえ、２０１４年３月、本学は「北海道大学創基１５０年に向けた近未来戦略（北海道大学近未来戦略１５０）」を策定した。

山口佳三総長は、次のように策定の意義を話す。

「様々な社会変革とともに、大学を取り巻く環境も大きく変わり、果たすべき役割が問われています。知の拠点である大学には特にイノベーションの創出と社会改革を主導できる人材の育成が求められますが、これはまさしく本学が『基本理念』のもとで育成しようとしてきた人材そのものです。しかし、今後、世界の大学と競っていくためには、従来と同じ考え方や体制では十分ではありません。

幸い、本学には開学以来培ってきた教育研究に関する多くの『個性的な強み』と、総合大学としての潜在力があります。知恵と総力を結集し、それらの強みを育て、有機的に結合した教育体制の再構築、さらには様々な制度改革が必要です。

そこで、本学が創基１５０年を迎える２０２６年にあるべき姿を見据え、５つの目標とそれを実現するための25の計画骨子を打ち出したものが『北海道大学近未来戦略１５０』です」。

５つの目標は、研究、教育、社会貢献、大学運営、広報のそれぞれの分野について、次のとおり定められている。

1．次世代に持続可能な社会を残すため、様々な課題を解決する世界トップレベルの研究を推進する。

ＧＩ-ＣｏＲＥのグローバルステーションでは、海外の研究ユニットとタッグを組んだ世界レベルの研究が進められつつあるほか、食と医療の融合を図る「フード&メディカルイノベーション国際拠点」の構築や、研究者支援体制の整備などに取り組む。新たに北極圏地域の大学との国際ネットワーク構築にも力を入れていく。

2．専門的知識に裏づけられた総合的判断力と高い識見、並びに異文化理解能力と国際的コミュニケーション能力を有し、国際社会の発展に寄与する指導的・中核的な人材を育成する。

巻頭で紹介した「スーパーグローバル大学創成支援」事業の本学構想「Ｈｏｋｋａｉｄｏユニバーサルキャンパス・イニシアチブ～世界に開かれ世界と協働～」を通して具体的な取り組みを行っていく。

3．学外との連携・協働により、知の発信と社会変革の提言を不断に行い、国内外の地域や社会における課題解決、活性化及び新たな価値の創造に貢献する。

２０１５年４月に「産学・地域協働推進機構」を設置し、組織型産学協働の推進や社会実装のための組織的地域協働の展開を行う。大学病院では先進医療の研究開発や、地域・社会の要請に応じた医療の提供をいっそう進めていく。

4．総長のリーダーシップの下、組織及び人事・予算制度などの改革を行い、構成員が誇りと充実感を持って使命を遂行できる基盤を整備し、持続的な発展を見据えた大学運営を行う。

教育研究組織の不断の検証や、評価による再編・最適化を推進し、効率的・弾力的な財務運営のため、資金配分を見直す。年俸制をはじめとする、柔軟な人事・給与制度を導入するなど、様々な取り組みを行う。

5．戦略的な広報活動を通じて、教育研究の成果を積極的に発信し、世界に存在感を示す。

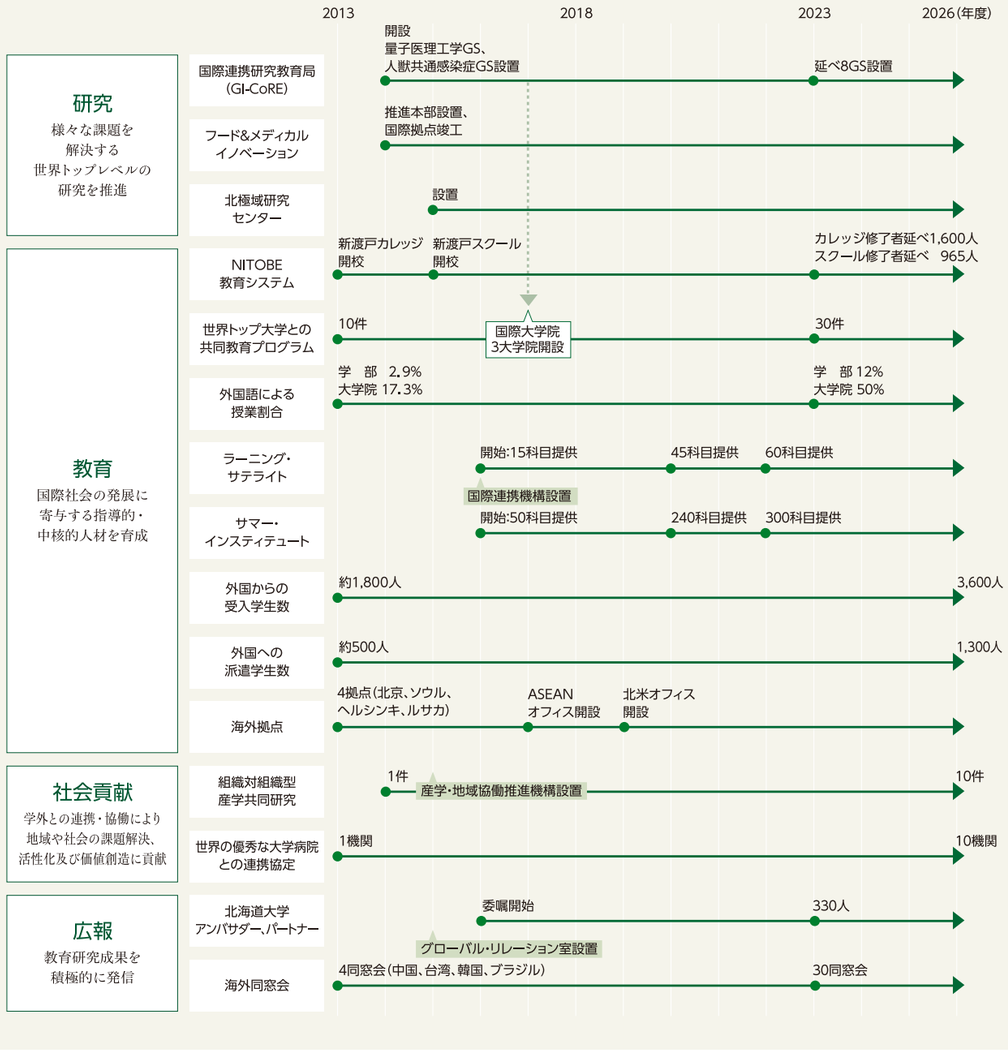
ブランド力を活用した双方向の広報活動の展開や、世界横断的な卒業生ネットワークの構築、さらには国際広報体制の整備を行い、日本のみならず国際社会に向けて積極的な広報活動を展開する。

山口総長は本学の強みや特色を交え、ビジョン達成に向けての意気込みを語る。

「本学では、これまでも様々な分野で北極域に関する研究を展開してきましたが、日本の北に位置する大学の強みや特色を活かし、意識して北極圏地域との連携を深めていきたい。そして、国内の中核的な研究拠点として海外の関係機関とのネットワークを構築するとともに、国際社会の発展に寄与する指導的・中核的な人材を育成するため、２０１７年度を目途に新たに３つの国際大学院を創設するなど、地球規模の諸課題の解決に積極的に貢献していきたいと考えています。そのための大学改革を大胆かつ着実に進めます」。

２０２６年、北海道大学は世界に確固たる地位を築き、世界各国で様々な課題解決に取り組んでいるだろう。

「北海道大学近未来戦略150」2026年の将来像



双方向遠隔授業



学びの共有。

２０１４年度後期、道内の国立大学が連携し、
教養教育の充実を目指して
「双方向遠隔授業」を開始した。
テレビ会議システムなどを使用し、
教養科目の一部を共同で
実施する取り組みである。
本格的なスタートとなる２０１５年度には、
本学は64科目を提供する予定だ。

高等教育推進機構の池田文人准教授が担当する「人間と文化 交流分析で読み解くムーミン谷の秘密」の授業。本学から64名、他大学から14名の学生が受講しており、共に心理学を学ぶ。

グローバル化の進展により、世界に横たわる問題はますます複雑化し、社会からは多様な知識・スキルを持った人材が求められている。一方、大学では豊かな人間性を育む「教養教育」の重要性が見直されている。

札幌農学校時代から「全人教育」として教養教育を重視してきた本学は、昨年２月、道内の国立大学（北海道教育大学、室蘭工業大学、小樽商科大学、帯広畜産大学、旭川医科大学、北見工業大学）と、学士課程の教養教育の一部を単位互換により実施するための協定を締結。これは、教養教育の充実強化を目的としたものであり、「双方向遠隔授業」はこの協定に基づき実施されている。

２０１４年度後期の試行では、各参加大学の特色を活かした科目が開講され、バラエティに富んだプログラムとなった。本学は、水産学に関する科目やロシア語、スペイン語など10科目を提供。他大学からは、生涯スポーツ、青少年文化、ポピュラーカルチャー、安全工学などの12科目が提供された。各大学の連携により、教養教育担当教員の確保が難しい単科大学や小規模大学においても、多彩な教養科目を開講することが可能となったのだ。

学生は、他大学から提供される単位互換科目を履修し、所属大学の単位として修得。距離や大学の枠を超え、多様な学習機会を獲得することになった。

授業がつなぐキャンパス

双方向遠隔授業は、本学と各大学をネットワーク回線で接続し実施する。本学では、８つの教室にテレビ会議システム、電子黒板、教室内を撮影するカメラなどを設置した。テレビ会議システムは、配信側・受信側の学生間のディスカッションやグループワークを可能にし、電子黒板で双方の書き込みを共有できる。

「モニタに先生や学生が大きく映し出されると、授業の臨場感が増し、離れているという感覚も薄まるようです」と、北海道地区国立大学連携教育機構副機構長の小林幸徳教授は、教室の様子を語る。

機器の操作は、各大学ともTA（Teaching Assistant）らによって行われる。本学では開始前に、TAなどを対象にした研修会を重ねた。授業の質を担保するため、多くの科目では授業の進行を支援するTAをさらに１名加え、２名体制としている。

実際に受講した学生の間からは、「配信元の先生が意見を求めてきたり、他大学の学生の意見も聞けたりと、普段の授業にない体験ができる」、「授業はディスカッションが多く、良い意味で緊張感がある」などの声が届いており、学生に良い影響を与えている。

「双方向遠隔授業では、各大学の特色ある授業を受けることができます。従来の対面授業とともに積極的に受講し、幅広い見識を身につけ学問の多様性を知ってほしいですね」と、小林教授は学生に期待する。

学びの場を広げた双方向遠隔授業は、新たな学び方の多様化につながる。協定を締結している大学間でのプログラムのブラッシュアップ、情報通信技術などの発達に伴い、さらに進化していく。







多彩な科目から、学問の多様性を知る。

双方向遠隔授業システムでは、学生との質疑応答や議論も可能。池田准教授は「教員と学生との双方向だけではなく、本学の学生と他大学生が双方向で活発に交流できれば、北大生の刺激にもなるのではないか」と、今後の展開に期待を込める。電子黒板は、教員だけではなく、他大学の学生も書き込むことができ、各大学の画面に表示される。

特集
広がり、
拡がる、
そして育てる。
Stage 3 社会

アグリフードセンター
北方生物圏フィールド科学センター 耕地圏ステーション 生物生産研究農場

食と向き合う。

2011年、ポプラ並木そばに開設された「アグリフードセンター」。乳製品加工実習室、食肉加工実習室、ジャム・ジュース製造室等を有する、農畜産物加工施設である。ここでは、札幌農学校の精神を受け継いだ教育・研究が行われている。

私たちは、目の前にある食べ物の〝生い立ち〟をどのくらい知っているだろうか。例えば、原料の名前は知っていても、それがどのような姿でどう育つかを知る人は多くないだろう。生産現場と食卓は離れ、その距離はますます広がっている。

札幌農学校の開校と同年の1876年（明治9年）に設けられた農黌園（のうこうえん）を発祥とする生物生産研究農場。通称「北大農場」では、牛や豚、鶏、園芸、養蚕などを対象に、いのちを生み育てるところから、いのちをいただくところまでを一本の線と捉え、総合的視点に立った研究活動を展開するとともに、農学部をはじめとする学部・大学院生を対象とした教育活動を行っている。

この「生産から食品加工まで」の一貫教育の一翼を担うのが、農場内にある「アグリフードセンター」だ。ここでは、乳製品や食肉製品、農産物の製造・加工に関する実習が行われている。

ミルクを素に、知を蓄える。

乳製品加工実習は、北大農場で飼育している牛から搾った乳の受け入れから始まる。学生は一滴一滴を確かめてから、バターやチーズ、アイスクリームなどの製造に取りかかる。

「原料に触れ、機械を動かし、食べ物を作る。学生が一連の工程を体験することは重要です。体験を伴うと、知識や思考は骨太になりますから」と、農学研究院の玖村朗人教授は意義を語る。

命を尊び、食を理解する。

食肉加工実習では、学生にと畜も経験させる。実習を担当する北方生物圏フィールド科学センターの若松純一准教授は次のように話す。「と畜実習を行う大学は珍しいと聞いています。学生は、生きている豚や鶏を見て『かわいそう』と言いますが、ある工程から『おいしそう』と言い始めます。自分自身の中で起きるこうした変化に気づかせることも、教育の一環なのです」。

飼育・と畜・加工を総合的に経験させなければ、食の本質は理解できないという考え方は、札幌農学校の流れを汲む本学農学部の伝統でもある。

知の還元、食の総合教育研究センターへと。

このような実習教育に加えて、若松准教授は、ハムの香りをテーマとした研究を行っている。昔のハムには豊かな香りがあったが、それが今、失われているのはなぜか。

若松准教授らは、昭和初期のハムの作り方を入手し、その記録通りに作ったところ、やはり現在のハムにはない独特の風味が感じられた。そこには微生物が関与しているのではないかという仮説を立て、現在、民間企業と共同研究を進めている。その成果は、共同研究の相手である企業の新製品にも活かされるだろう。

食の本質を理解させる実践的な教育・研究を行うことにより、食を総合的に考えることができる人材が育成され、新たな研究や技術開発にもつながっていく。まさしく本学が掲げる「実学の重視」の体現である。

アグリフードセンターはこれらに留まらず、地域の親子を対象に食育を実施。社会に対して「食の安全」についての情報発信を行うなど、その活動は広がりをみせている。

食の安全・安心に関する問題がたびたび取り上げられるなど、私たちの生活にとって身近な「食」の重要性の認識が高まりつつあるなか、アグリフードセンターは食の総合教育研究拠点としてますます大きな役割が期待されている。


チーズは低温・高湿度の環境下で熟成させるため、カビの発育を防止するためにも毎日の丹念な管理が必要である。








バター製造時、生乳から分離した生クリームを撹拌し練り上げる「チャーン」。サイコロ型のこの器械は、農学部の実習で40年以上使用されている。乳製品製造実習工場としては6代目となるアグリフードセンターは、食品実習施設として長い歴史を持つ。


清潔に保たれ、動線にも配慮がなされている食肉加工実習室。入室前にはエアシャワーで埃を吹き飛ばす。札幌農学校開校以来、肉製品製造実習工場としては4代目となる。

フロンティア
スピリットを
訊く。

加藤光久（ゲスト）

トヨタ自動車株式会社 代表取締役副社長

氏

世界のモータリゼーションをリードするトヨタ自動車株式会社。２０１４年12月には、世界で初めて量産型燃料電池自動車「ＭＩＲＡＩ」を販売するなど、独創的なアイデアや高品質なものづくりで確固たる地位を築いてきた。本学ＯＢの加藤光久副社長は、カローラ、クラウンの製品企画に長年携わってきた。その舞台裏や「カイゼン」、トヨタブランドなどについて伺った。



無駄なことはない

すべての経験が、今の自分に活きている。

自動車の原体験、航空部での経験。

三上　本日は旭川での取材ですが、加藤さんのご出身もここ旭川ですね。

加藤　ええ、高校まで旭川で過ごしました。また、トヨタが士別にテストコースを持っていますので、出張で時々帰省しています。

三上　それはいい機会ですね。では、加藤さんはなぜ北大を志望されたのですか？

加藤　漠然とですが、進学するなら北大にと考えていました。理類で入学し、工学部機械工学科に進学しました。

三上　機械ということは、昔から自動車に興味を？

加藤　ええ、小さい頃から興味を持っていました。中学生になると免許がなくても運転できる場所で操ってみると、とてもおもしろくて。これが私の自動車の原体験です。そして、モータリゼーション華やかなりし時代でしたね。

三上　クラブ活動は？

加藤　迷わず航空部に（笑）。父の影響でしょうね。父が戦時中に飛行機の製造に携わっていて、話をよく聞いていましたので、空への憧れがありました。航空部は、グライダーに乗って空を飛ぶことが活動の中心です。グライダーは飛行機と異なり、エンジンなどの動力を用いずに滑空し、上昇気流を利用してフライトします。北大航空部は旧七帝大の中で最後に設立されたせいか当時は機体を所有しておらず、丘珠の北海道航空協会などへ通っていました。自動車での移動が欠かせず、唯一免許を持っていた私がいつも運転手役。自動車とも縁がありました。

三上　当時、大学はどのような雰囲気でしたか。

加藤　ススキノの交差点で円陣を組み「ストーム」をするなど、バンカラな校風でしたね。私もススキノで飲んで家に帰る途中、酔った勢いで大通公園の噴水で泳いだことがありました。大らかな時代ですね（笑）。

三上　いい時代でしたね。勉学の方はどうでしたか。

加藤　燃焼工学講座でガソリンエンジンを専門に研究しました。隣にはディーゼルエンジンを研究する講座があり、そちらの学生も自動車好きばかり。みんなで車談義をしたり、車をいじったり。



大学3年次には、
とにかく一生懸命に
勉強しました。
―加藤



撮影協力／旭川グランドホテル

カローラ、クラウン、未知への挑戦。

自動車に夢が広がるような感覚を分かち合っていました。就職先も皆、自動車業界志望で、あの会社はどう、この会社はどうと、勝手なことを言っていましたよ（笑）。私の中で、トヨタは印象が良かったですね。また、3年次には、とにかく一生懸命に勉強しました。勉強がおもしろく、友人の家を泊まり歩いて教え合うほどでした。

三上　トヨタに入社され、最初の配属先はどちらですか。

加藤　大学での研究を活かそうと、エンジン設計を希望しました。運良く叶い、エンジンにもいろんな種類があるのですが、スポーツカーのエンジンを8年間担当しました。新しいことにチャレンジできる環境で楽しかったですね。北大の先輩も多くいましてね、副社長であった松本清さんからは「せっかく北海道から内地に来たんだから、好きなようにやれ。何も遠慮することはない」とよく言われました。そのように育てられ、薫陶を受けまして、私も部下には「Be ambitious!」と事あるごとに伝えています。

三上　その後、製品企画ですね。

加藤　エンジン設計を担当するなかで、車体・ボディに興味を抱き始めたんです。それで、手っ取り早く（笑）自動車全体を知ることができる部署はどこかと考えまして。製品企画は車をコーディネートし、まとめていく部署です。

三上　それで希望が通って。

加藤　そうです。カローラの製品企画を16年間、4年に一度のモデルチェンジを4回担当しました。初めはエンジン部門が中心でしたが、徐々に携わる範囲が広がり、4回目のモデルチェンジは、ほとんど自分がやったという自負があります。とても上司には言えませんが（笑）。モデルチェンジの度に車がヒットし評価され、うれしかったですね。上に仕えて仕事するのではなく、自分自身が企画した自動車をつくってみたいと欲が出始めた頃、12代目クラウン「ゼロクラウン」のチーフエンジニアを命じられました。

三上　高級車であるクラウンのリーダーとは、責任重大ですね。



友人との学び合い、
切磋琢磨は
貴重な経験です。
―三上



加藤　カローラでの16年間の経験をクラウンにぶつけようという強い思いがありました。新しいことに取り組む時には、リーダーシップを発揮して引っ張っていかなければ進まないものです。それは、先輩の背中を見て教わったことでした。そして、チームのメンバーにはこう言いました。「出身地も経験してきたことも異なる者が集まったこのチームは世界でひとつ。このチームでつくるものは、たったひとつのかけがえのないものだ」。メンバーの共感を得ることが大切なんです。

三上　とても印象的なメッセージですね。

加藤　もうひとつ実感したことがありました。専門外の自動車用語は難しいと思い込んでいたのですが、ある時「グライダーと同じじゃないか」と。北大航空部でのグライダー経験、大学で友人とあんなにも勉強したこと、すべてが今の自分に活きている、無駄なことはひとつもないと思い至りました。

三上　ゼロクラウンにはどのようなポリシーがあったのですか。

加藤　「日本独創」です。創造性・独創性発揮のためにトヨタのオリジンである「日本」を立脚点にものづくりを追求するという考え方です。私がチーフエンジニアとなった2000年当時、高級車の世界では、欧州車に比べて日本車は走りでは負けるという空気がありました。しかし、私は「世界に通用するクラウンをつくる」と宣言しました。当初は輸出の計画もなく、「何を言っているんだ」という雰囲気もありましたが、周りを説得し実現していくのがチーフエンジニアの仕事。フロンティア精神で遂行し、評価につなげていきました。

心に「TOYOTA WAY」、現場に「カイゼン」。

三上　研究開発には、相当の時間と費用をかけるわけですよね。

加藤　デザインやアクセサリーを変えるだけならまだしも、新しい技術を導入しようとすると、今までのやり方が通用しなくなります。相当の時間と費用が必要です。我々の世界は常に競争ですから、技術開発し続けないと負けてしまいます。ですが、この10年ほど、言われたことはきちんとやるが、失敗できないという雰囲気が社内にありました。そこで、「失敗してもいい、チャレンジしろ」と社長自ら全社員に伝え続け、ようやくトヨタ本来の姿、原点に戻りつつあります。

三上　人材育成にも通じるのではないですか。

加藤　そうですね。人材育成のカギは考え方の伝承だと思います。ライバル社より先へ行くことは大切なことですが、それは目的ではありません。トヨタの目的は、自動車を通してお客様に笑顔になってもらうことです。

三上　世界に名の知られるトヨタ生産方式の核をなす「カイゼン」について、お聞かせください。

加藤　「カイゼン」の本質は、無駄の排除です。いかに効率良くつくるか、カイゼンには終わりがありません。なぜ、そこまで無駄を省こうとするのでしょう。世の中では、原価＋収益＝販価が常識ですが、トヨタは違います。販価－原価＝収益と考えます。販価を決めるのは我々ではなく、市場であり、お客様です。収益を上げたいなら、原価を下げるしかないのです。この概念がトヨタにはあります。そのためには、サプライヤーとの積極的なコミュニケーションが必要になってきます。

三上　大学においてもブランドの確立が求められています。世界的なトヨタブランドについては、どのようにお考えですか。

加藤　まず、商品への信頼性があると思います。そして、トヨタには昔から自動車を通して社会に貢献するという考え方があり、それを目指すことこそ、トヨタブランドだと考えます。また、トヨタには、トヨタグループの創始者である豊田佐吉の考え方を成文化した「豊田綱領」があります。事業の目的、仕事に対する姿勢、日々の心がけなどを示す5箇条からなり、トヨタグループ各社に受け継がれ、全従業員の行動指針、心のより所として機能しています。さらに、「トヨタのものづくりの精神」は「TOYOTA WAY」と称されていますが、この根底には「豊田綱領」があります。このように歴史をつないでいくことこそが、ブランド形成とも言えるのです。

迷った時には、原点に立ち返る。

三上　本学には、「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」という4つの基本理念があります。私たちもその時代に合わせた解釈をしながら、大学の指針としています。

加藤　判断に迷った時などは、歴史をひもとくと気づくこと、わかることがあります。以前、ある方から、彫刻家ロダンの言葉を教えてもらいました。「伝統とは形骸を継ぐものにあらず。その精神を継ぐものなり」。これが真実ではないでしょうか。

三上　なるほど、同感です。最後に、本学に期待することは何でしょうか。

加藤　私が学生時代に感じていたことは、北大の壮大さ、大らかさ、寛容、チャレンジ精神です。キャンパスのポプラ並木を歩くこと、偉大な先輩たちが著した書物を読むことからも、そういったものを養えたと感じています。このような精神が脈々と流れる〝エルムの森〟で学ぶ後輩たちは、世界のどこででも通用すると信じています。そのためにも、これからも建学の精神に根ざした教育研究を進めていってほしいと思います。

三上　はい。大切にしてまいります。本日はありがとうございました。

本学の基本理念を大切に継承していきます。
—三上

歴史をつないでいくこと、それこそがブランドです。
—加藤



北海道大学理事・副学長
三上 隆
Takashi Mikami

1949年、北海道出身。工学博士。専門は土木工学。北海道大学工学部土木工学科卒業、同大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了。1974年に北海道大学工学部助手に採用され、助教授を経て、1994年に工学部教授。2006年に大学院工学研究科長・工学部長に就任し、2011年より現職。理事として、総括、評価、広報、情報公開、内部統制※、リスク管理、同窓会、施設・環境、防災を担当。
※2015年4月から担当

トヨタ自動車株式会社 代表取締役副社長
加藤 光久
Mitsuhisa Kato

1953年、北海道出身。北海道大学工学部機械工学科卒業後、1975年にトヨタ自動車工業株式会社（現 トヨタ自動車株式会社）に入社。第1開発センターチーフエンジニア、第2トヨタセンターセンター長などを歴任。2010年に専務取締役に就任、専務役員、製品企画本部本部長などを経て、2012年より現職。2013年には第1および第2トヨタ（技術・事業）統括、TNGA企画部統括を兼務。

「情報メディア学」を

研ぐ。



情報科学が導く
”気づき“を与える
情報検索システム。

北海道大学大学院情報科学研究科
メディアネットワーク専攻　メディアダイナミクス研究室
長谷山 美紀 教授
Miki Haseyama

博士（工学）。北海道大学大学院工学研究科修士課程修了。1994年に北海道大学工学部助教授、2006年より現職。専門は、画像・音響・音楽・映像などのマルチメディア信号処理。次世代情報アクセスシステムの開発で高い評価を得る。小学生の頃には昆虫や天体、中学生では英語など、様々なことに興味を持つ。工学の道に進むきっかけは、数学の教科書にあった「1から始まるn個の奇数の和がnの二乗になることを証明せよ」という演習問題。高校の数学で納得できる説明に出合った驚きと感動が、数学の考えを用いて「物をつくる」工学への進路を決定づけた。



研究室に所属するメンバーは約30名。「人を育てるのが使命」と、学生の教育にも力を注ぎ、愛用の万年筆で論文指導を行う。

ニュアンスを理解する技術とは？

コンピュータ上でキーワードを打ち込めば、たちどころに必要な情報が列挙される。インターネットを通じた情報検索は、今や科学技術から日常生活にまで浸透し、なくてはならない技術である。しかし、知りたい情報が漠然としていてキーワードが見つからない時もある。また、すべての人がコンピュータの扱いに慣れているわけでもなく、病気や老齢のため、自由に扱えない場合もある。

そこで、長谷山美紀教授は必要な情報を自動で探し出す技術が必要だと考え、画像や映像を人間のように理解するシステムの実現を目指している。

例えば、犯行現場を目撃したとしよう。自分が見たものを警察官に説明しようとしても、予期せぬことなので、そこには曖昧な情報が多く含まれている。言葉で説明したとたん、そこに含まれるキーワードがフィルターとなって本当の情報を消し去ってしまうことがある。

長谷山教授は画像を言葉で表すのではなく、画像の模様や色彩、それらの位置などの特徴を数値化し、２つの画像が似ているか否かを判別する技術、言い換えればニュアンスを理解する技術を開発した。この技術を導入した検索エンジンでは、数多くの画像の中からイメージに近いものを直感的に選択するだけ。文字入力は一切必要ない。画像を1枚選ぶだけで、それに似た画像がコンピュータのモニタ上に自動的に集まってくるのだ。

「それらの中には、思っていた以上に本物に近い画像や、無意識に考えていたことを思い出させる〝気づき〟を与える画像もあるかもしれません。それが、この技術の大きな特徴です」と長谷山教授。次の段階では、特定の画像とよく似た画像を、インターネット上から集中的に探し出す検索システムを開発。例えば、このシステムはストローの形状が写った画像であれば、注射針も蚊の口器も集めてくるという、異なる画像の共通性を探し出すものである。

「それらの機能にどのような関係性があるのだろうかと、疑問が湧きますよね。実は、痛くない注射針の開発に共通する機能が活かされています。このような共通性に関する疑問から、新しい意味や価値を読み取れるかもしれない。人間の発想を助ける働きもしてくれるのです」と、長谷山教授は開発の意義を語る。

表情や動きを検索ワード化し、気分を画像化。

さらに、近年では新しいシステムの実証実験に乗り出した。四季の映像が映し出されるディスプレイに、赤外線センサーとカメラを設置。ディスプレイの前に人が立つと、センサーが人の表情や動き、服装などを感知し、それらの情報からコンピュータがその人の気分を推定。その人に合った四季の映像を映し出すというものだ。同じ人物でも、上着を脱いでワイシャツ姿になり元気に動くと、ディスプレイは夏の映像を映し出す。２０１２年、札幌駅前通地下歩行空間でこのシステムの実験を行ったところ、多くの人が立ち止まり、「コンピュータが人間の気分を読めるのか」と驚いたそうだ。長谷山教授が「自分の鏡のようなもの」と話すこのシステムは、広告などの行動分析にも応用可能であり、メディアからも注目を集めた。

今年２月、人出で賑わう「さっぽろ雪まつり」期間中には、人の身振りから好みを学習し、身の回りの様々なコンテンツをまとめて提示するシステムの実験を行った。将来的には、好みの商品などを自動的に探し出すシステムなどへの応用が考えられるという。

直感や気分を出発点に、人間が情報や知識を獲得するメカニズムを探求し続ける長谷山教授。人間の知的好奇心・創造性を呼び覚ますような情報技術で、これからも私たちに気づきを与えてくれるだろう。



特によく使うキーボードの「A」と「S」がはがれ、テープで補修しているノートパソコン。いつでもどこでも仕事ができるよう、常に持ち歩いている。

研究に熱中！





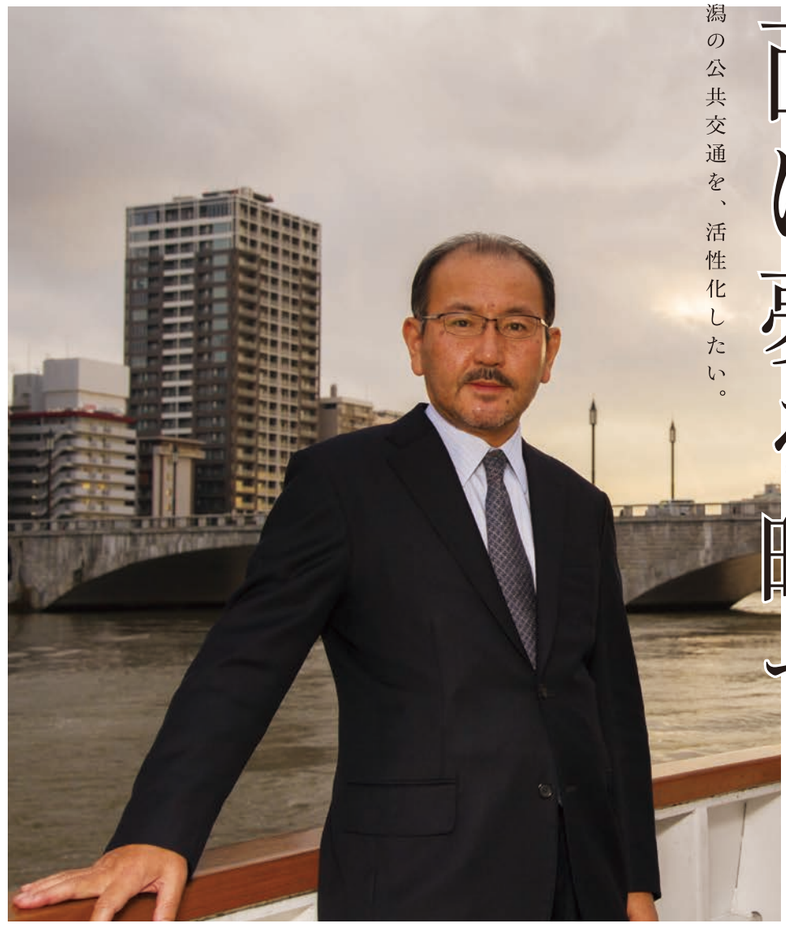
「研究が趣味」と言い切る長谷山教授。米国のグーグル本社を訪問し、技術担当のディレクターとディスカッションするなど、常に研究のアイデアを練っている。

愁う。

卒業生インタビュー
同窓異曲

水面に夢を映す。

故郷・新潟の公共交通を、活性化したい。



信濃川ウォーターシャトル株式会社
代表取締役社長
栗原 道平
Michihei Kurihara

| 経済学部卒業 |

水上バス運航会社「信濃川ウォーターシャトル」のトップ、栗原道平さん。水上バスを基点に、故郷の活性化を図ろうとする思いを語っていただいた。

―最初に、学生時代のお話を聞かせていただけますか。

1975年に文類に入学し、すぐさま洋弓部に入部しました。2年次になり経済学部に移行しましたが、ゼミの先生がプリンストン大学で研究するため渡米されたこともあり、ゼミよりも洋弓部での活動が学生生活の主要な部分を占めることになりました。

今考えれば、まるで貴族のような生活です(笑)。4月から10月まで、晴れていれば射場で弓を引く毎日でした。暗くなって的が見えなくなるとボウケースに弓をしまい、夜は北18条か24条あたりで飲んでいたような気がします。

―なぜ、水上バス事業を興そうと考えられたのですか。

勉強をほとんどすることのなかった私でしたが(笑)、海外を相手に仕事をしてみたいという思いは強く、第一志望の三井物産株式会社に就職することができました。その後、希望していた海外赴任も経験し、ひと仕事やり終えたという自負がありました。そして、36歳の時に会社員生活に区切りをつけ、新潟にUターンしました。地元の発展に貢献したいという思いからでした。

いざ戻って街を改めて見渡すと、公共交通網の不備が目に付きました。また、新潟市はマイカー依存度が非常に高く、全国的にみても温室効果ガス排出量が高い県庁所在地です。都市交通の改善が必要だと強く感じました。

青年会議所でまちづくり系の委員会に所属した私は、そこで利便性の高い公共交通ネットワーク整備の必要性を訴え、その一部を構成する交通手段として「信濃川を利用した水上バス」を提案しました。

新潟市の真ん中を流れる信濃川は、日本一長く、水を満々と湛え、ゆったりと流れていく国内屈指の大河です。鉄道が敷設される以前には、信濃川は河川舟運(しゅうん)が盛んでした。その恩恵を受け、新潟県は繁栄したそうです。舟運が栄えていた新潟の復活もイメージしました。

当時、2002年FIFAワールドカップが新潟でも開催されることが決まっていました。これを好機と捉え、青年会議所の先輩や同志が中心となって、水上バスの運航会社を設立することとし、1株5万円で株主を募集しました。うれしいことに多くの市民の方々にご賛同いただき、1998年に47人の株主によって会社を設立、その後数次の増資を経て株主総数は750人を超えるまでになりました。

そしてその翌年、1隻目の船を完成させることができました。市民株主によって公共交通事業を興そうとする試みは、「新潟の挑戦」として全国からも注目を浴びました。



1976年8月の洋弓部での帯広合宿。「大学4年次には、北海道学生アーチェリー連盟の委員長を務めました。当時、全国的には北海道と北信越の学連が全国学生アーチェリー連盟に未加盟となっていましたが、私が委員長の時に、北海道は加盟を果たすことができました」



2隻の水上バスは、新潟市歴史博物館「みなとぴあ」、新潟コンベンションセンター「朱鷺メッセ」、「萬代橋」をくぐり、約9キロメートル上流の「新潟ふるさと村」を結ぶ旅客定期航路を往復している。周遊便やチャーター便、水上結婚式などにも利用されている。



栗原さんの合格通知書と現金領収証書。大学時代の思い出の品を探していて見つかった。当時の入学料は5万円、前期分授業料1万8千円。「バンカラ気質や恵迪寮歌『都ぞ弥生』を受け継ぐ北大に憧れ、入学を決めました」

―水上バスをはじめ、公共交通が果たす役割とは？

地方は今、移動の利便性がどんどん低下しています。鉄道、地下鉄、バス、新潟で言えば水上バスを含めた、定時性が担保された中大量の公共交通ネットワーク構築というインフラ整備は、都市として存続、発展していくためにも重要です。

それに加えて、公共交通機関同士の連携も必要です。ヨーロッパでは、地域の公共交通輸送公社ともいうべき事業体が、鉄道、バス、トラム、船を一元で運営しています。旅行者は共通のチケットで旅ができ、とても便利です。観光の視点から、スムーズな移動を促せる公共交通の整備は、おもてなしには欠かせないと思います。

雄大な信濃川から四季折々の風景を眺める。

―現在、運航している水上バスは2隻ですね。

都市の公共交通として機能させることと、観光利用の両方に目配りした船を2隻所有しています。いずれも19トンと小型ながら100名以上の輸送能力を備えています。

船名は、建造時期がわかりやすいようにアルファベット順とし、1999年に就航した1号船はAから始まる名前の中からアナスタシアとしました。ギリシャ語源で「復活」という意味があり、この船で舟運を復活しようという願いを込めました。

2隻目は2002年就航のベアトリスで、ラテン語源で「幸せをもたらす女性」という意味です。船は女性名詞であり、客船ではクィーン・エリザベス号のように女性の名前を付けるのが慣例となっている例もあるんですよ。

―最後に、本学への期待をお聞かせください。

広く世界中から優秀な学生が目指して来る、世界の北海道大学になってほしいと願っています。

PROFILE

新潟県出身。1979年に北海道大学経済学部経営学科卒業。三井物産株式会社を経て、“水の都”新潟市にUターン。1998年に信濃川ウォーターシャトル株式会社を設立し、都市公共交通としての水上バスの可能性を求め、観光振興にも励む。家業の生コンクリート製造会社、栗原レミコン株式会社の代表取締役社長を兼務する。



2


1

韓国における北海道大学のランドマーク、ソウルオフィス。

From Seoul

ソウルオフィスは、ソウル最大の観光名所でもある江南（カンナム）にあります。江南は、ファッション・芸術・文化のみならず、貿易と金融、ベンチャー・ITといった先端産業と、テコンドーの聖地である国技院、朝鮮王陵の宣靖陵（ソンジョンヌン）などの文化遺産が共存している地域で、K-POPアーティストであるPSY（サイ）の「オッパ（お兄さん）は江南スタイル」でいっそう有名になりました。

この江南において、ソウルオフィスは2011年の開設以来、同窓生にとっては北大を思い出す懐かしい場所として、本学への留学を希望する学生や研究交流を望む研究者にとっては窓口としての役割を果たしています。

2014年4月にソウルオフィスに所長として赴任してから早1年。様々な活動を行い、本学をアピールしてきました。全北大学校と江陵原州大学校では「北海道大学交流デー」を実施し、それぞれの大学の特化分野である獣医学および歯学分野、水産学分野において学術交流を進めています。

そして、日本学生支援機構（JASSO）などが主催する留学フェアに参加し、ブースを設けて広報活動を行いました。また、2015年4月からスタートする外国人留学生を対象とした学士課程の教育プログラムである「現代日本学プログラム」に国際的な人材をリクルートするため、韓国内の「外国語高校」に関連資料を送付し、多方向から北海道大学の知名度を高めるよう努めました。

最後に。グローバリゼーションが大きな関心を集めるなか、本学は「スーパーグローバル大学」トップ型に採択されました。大学の国際化や大学力強化のために全学的な取り組みが進む今こそ、本学の海外拠点としてソウルオフィスの役割がますます大きくなります。これまで以上に大学に貢献できるよう努めていきます。

1. ソウルオフィスが入る建物
2. 全北大学校での研究交流セミナー



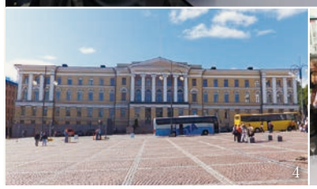
韓国／ソウルオフィス所長

車 柱栄

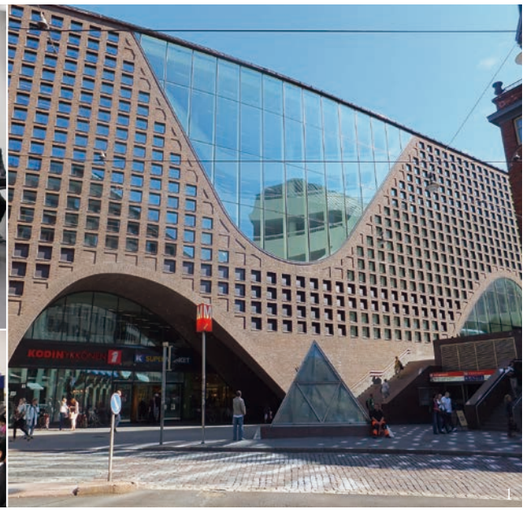
Cha, Joo Young

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター准教授。専門は、森林病理学、菌学。博士課程から日本に留学し、1995年に北海道大学大学院農学研究科を修了しました。


2


4


3


1

ヨーロッパへの窓口、ヘルシンキオフィス。

From Helsinki

ヘルシンキオフィスは、2014年からヨーロッパ全土でも活発に活動しています。副所長の私は、2013年には北欧とドイツ、2014年からはフランスとイギリスを中心に活動。所長の田畑伸一郎先生は主に東ヨーロッパを担当し、本学がロシアで北極研究を推進するための活動を行っています。フィンランドでの大学間交流協定校はトゥルク大学と東フィンランド大学の2校が増え、トータルで6大学になりました。フィンランドだけでは限界があるため、ヨーロッパの大学を視野に開拓中です。

留学生を集めるためには、各大学が実施する説明会に参加することが効果的です。昨年はストックホルムのスウェーデン王立工科大学からの3名、フィンランドのアールト大学からの4名が、説明会経由で本学大学院への留学が決まりました。

昨年12月にドイツのブレーメン大学で開催した「北海道大学交流デー」は、ヘルシンキオフィスのメインイベントであり、オープニング、パラレルセッション（低温科学、水産学など）、インフォメーションなどを実施しました。本学から30名以上、またドイツ以外の国からの参加者も多数おり、「北大はブレーメン大のキーパートナー」という声が上がり、大成功でした。

フィンランドといえばムーミン。2014年はムーミンの作者、トーベ・ヤンソンの生誕100周年ということで盛り上がるか!?と思っていたところ、現地では記念の限定商品が出回ったくらいで、割と静かなブームでした。おそらく日本のほうがイベントなど多かったのではないでしょうか。今年はムーミンの70周年記念。とりあえず、フィンランド人の体型だけはムーミン一家にそっくりなのですが…。

ヘルシンキオフィスはヨーロッパ中で活動していますが、まだまだフィンランド内で活動しているオフィスというイメージが強く、もっとヨーロッパというイメージを定着させていきたいと思っています。

1. ヘルシンキオフィスが入るヘルシンキ大学の図書館
2. 本学の紹介を聞くブレーメン大学生
3. ブレーメン大学でのレセプション
4. ヘルシンキ大学のメインビル



フィンランド／ヘルシンキオフィス副所長

サロマ，テロ

Salomaa, Tero

ヘルシンキ大学卒業。北海道大学の研究生として政治学や北方圏に関する研究に従事した後、出版社などを経営。2012年の開設時からヘルシンキオフィスに勤務しています。

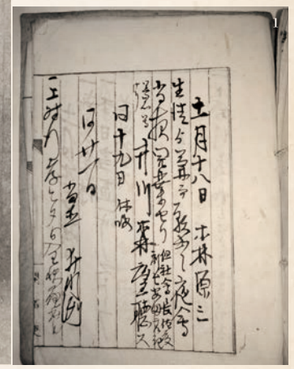
温故知新 北海道大学

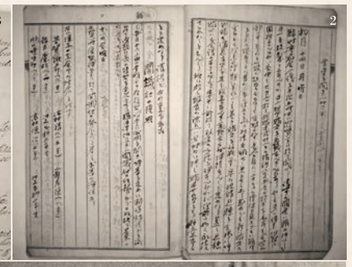
挑戦の140年

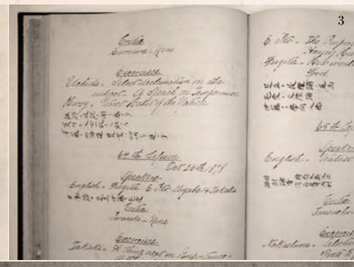
SCENE-3

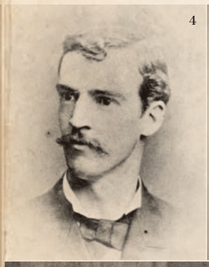
1876-1923

「開識社」と「遊戯会」





















1. 第1回開識社開催を記録した「当直日誌」（1876年 大学文書館蔵）
2. 開識社再建を記載した「寄宿舎記録」（1901年 大学文書館蔵）
3. 「開識社記事」（1878年 大学文書館蔵）
4. 遊戯会開催を提案したD.P.ペンハロー（1877年頃 大学文書館蔵）
5. 開識社結成に参加した第一期生（1879年頃 大学文書館蔵）
6. 新渡戸稲造による第1回遊戯会競技イラスト（1878年 盛岡市先人記念館蔵）
7. 『第拾六遊戯会報告』（1897年 大学文書館蔵）
8. 創立25周年記念遊戯会（1901年 大学文書館蔵）
9. 第3回遊戯会を記録した志賀重昂の日記（1880年 大学文書館蔵）
10. 遊戯会の絵はがき（1918年 大学文書館蔵）

Hokkaido University HISTORY 1876-1923

1876年11月 - クラークの助言により開識社を結成・開催

1877年 1月 - クラークと第1期生が手稲山でフィールドワークを実施

1878年 6月 - 第1回遊戯会を開催

1890年 5月 - 遊戯会運営組織として札幌農学校遊戯会を結成

1893年11月 - 前年春から活動を休止していた開識社を一時的に復活

1901年 5月 - 創立25周年記念遊戯会を開催
9月 - 遊戯会運営組織が文武会遊戯部となる
10月 - 寄宿舎において開識社を再建

1923年 5月 - 文武会遊戯部を陸上競技部に改編
6月 - 最後の遊戯会を開催（第40回）

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives

北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。

課外活動の始まり

札幌農学校の開校時、初代教頭W・S・クラークは自身が学長を務めるマサチューセッツ農科大学に倣ったカリキュラムを編成し、当時の日本の高等教育機関では例を見ない“Elocution”（演説法）を組み込んだ。英米名士の演説を暗誦して、その態度や抑揚の指導を受けるというものであった。

開校から二ヵ月半後の一八七六年十一月一日、第一期生の十九名全員が署名し、「知識を広め、同時に日本語・英語両方の演説法と文章表現法を上達させるため」、課外に文学会を開く許可願を校長に提出した。授業で学んだ演説法を、自主的な課外活動として実践的に磨く場である。

「開識社」の演説・議論・討論

十一月十八日の夜、佐藤昌介を会長として第一回会合を開き、以降、毎土曜日午後七時に開催した。この会合は結成目的に因み「開識社（かいしきしゃ）」と名付けられた。基本的に農学校生による活動であったが、時には「或る晩クラーク先生が他の教師を連れて、突然実見に来たのは最も不意の襲撃で、時に小野琢磨氏が十五分斗り立ち往生した」と佐藤氏が回想したように、教員が顔を出し、演説者を面食らわすこともあった。

開識社では、各人の“speech”（演説）、設定した論題に出席者各人が意見発表をする“discussion”（議論）のほか、“debate”（討論）も行った。一八七九年三月二十二日の第七十四回開識社では、「北海道ニ鉄道ヲ建築スルハ目今ノ急務」を主題として“debate”を行い、佐藤昌介・栂野四男吉が積極論、伊藤一隆・太田稲造が消極論を主張し、出席者が投票した結果、積極論に八名、消極論に二十五名の支持が集まった。開識社の活動は、農学校生の好奇心を刺激する高度な知的ゲームという側面もあった。

開識社の活動は十五年間続き、その後も形を変えて受け継がれた。

学校運動会の嚆矢「遊戯会」

一方、一八七八年六月一日、クラークと共に教師に着任したD・P・ペンハローの提案により、札幌農学校は“Athletic Sports”を開催した。当初は「力芸」「力戯」と訳していたが、後には「遊戯会（ゆうぎかい）」と呼ぶようになった。札幌農学校の遊戯会は、定期的に開催する日本最初の学校運動会であった。

第二期生である新渡戸稲造は母親に宛てた書簡に、第一回遊戯会の様子を伝えている。開拓使本庁舎の門前で実施したこと、見物人が四、五百人に上ったこと、さらに、イラスト入りで袋まとい競走・玉投げ・石投げ・跳躍・ハードル競走・目隠し競走・芋拾いなどの開催競技を説明し、競技の勝者にはハンカチ・手帳・ステッキ・香水・鏡・紙・筆・手袋などの賞品が授与されたと記載している。

注目すべきは、第三回遊戯会についても第四期生の志賀重昂が日記に「見物人山の如し」と記しているように、観客が多数集まったことである。遊戯会は当初から札幌農学校の課外活動という枠に止まらず、札幌隣の住民にも娯楽を提供する文化イベントであった。そして、後の遊戯会には、茶菓の模擬店や仮装行列、他校生徒が参加する競技も加わり、札幌の街の年中行事の一つとなった。一九二〇年代に遊戯会はお祭り要素を排除した陸上競技会へと変質し、一九二三年の第四十回を最後にその名称も消えた。

“Athens of the North”

札幌農学校では、このほかにも聖書講義をはじめ、様々な課外活動が盛んであった。クラークと第一期生が冬の手稲山で植物採集を行ったことに始まるフィールドワークは、後に夏季休暇中の課外行事となり、学校修学旅行の嚆矢との指摘もある。

第二期生は入学時、“Athens of the North”を合い言葉に、建設間もない札幌を学芸・文化の街として「北のアテネ」にしたいと考えた。こうした思いは初期の農学校生に共通するものであっただろう。東京など本州以南の歴史ある都市とは違い、新興都市である札幌では知的欲求を満たす文化も様々な感性を刺激する娯楽も、自分たちで一から形作る必要があった。課外活動の興隆は若き熱情の発露でもあった。

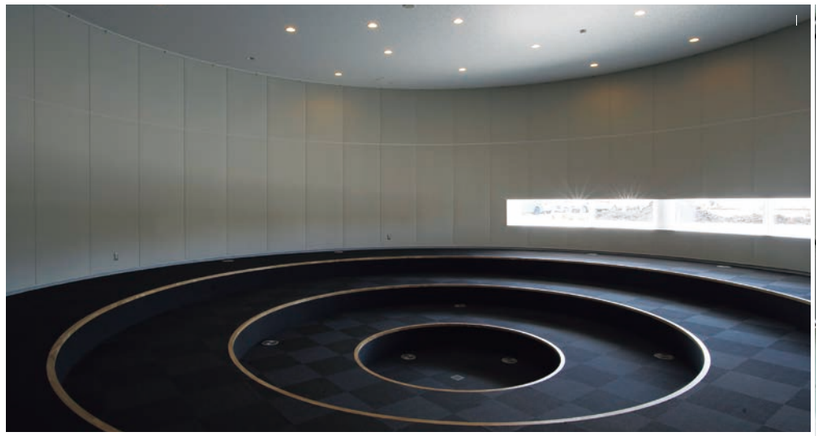
「わが札幌をしてスコットランドのエジンバラの如く学芸の淵源地たらしめねばならぬ、
この地を“Athens of the North”たらしむるのが、我々の希である。」

01 フード&メディカルイノベーション国際拠点の完成

3月20日（金）、「フード&メディカルイノベーション国際拠点」施設が北キャンパスエリアに竣工しました。〝ひとつ屋根の下〟をコンセプトに産学官と市民が多様なかたちで集うこの拠点で、札幌農学校時代から続いてきた「食」にまつわる研究、そして、医療分野の先進的な研究の融合を図るべく、産学官連携の革新的な研究開発を展開していきます。

拠点施設は5階建てで、エントランスを入ると光が差し込む明るくオープンな空間が広がり、約200人収容の「多目的ホール」や「フューチャールーム」が設置されています。2〜5階は参画企業と大学の研究室や実験室に充てられており、さらに2階に「オープンカフェ」「ディスカッションプラザ」「展示スペース」、3・4階には隠れ家を意味する「DEN」を設け、多様な交流機会を創出するための工夫を凝らしています。

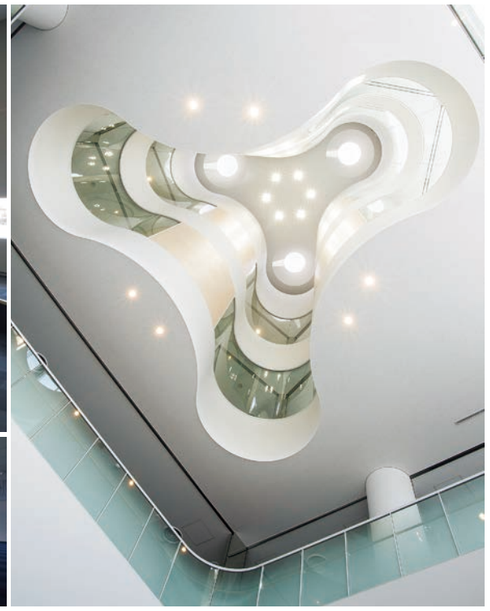
COI※「食と健康の達人」拠点として機能する本拠点には、企業をはじめとする38もの機関が参画。ともに、健康度のわかる新しい「健康ものさし」と「セルフヘルスケア」に基づく、個人の健康状態に最適な「美味しい食、楽しい運動」の商品・サービス提供と、地域における持続的な笑顔あふれる「健康コミュニティ」の実現を目指します。


1


4


3


2



エントランスホールの吹き抜け。本学のシンボルマークにも使用されている「エンレイソウ」の形状となっている。

1．フューチャールーム。外観に特徴を生み出している円形空間。防音が効いており、音を楽しむことができる。

2．オープンカフェ。産学官の多様な人材がコーヒー片手に交流できるスペース。窓が大きく、見晴らしが良い。（後にテーブルやイスを設置予定）

3．ディスカッションプラザ。扉がなく開放的な空間。階段状になっており、好きな場所に腰かけ自由に語り合える。

4．DEN。エントランスの吹き抜けの形状を活かした交流スペース。3・4階にそれぞれ3つ設けられ、落ち着いて研究のアイデアを練る場所としても最適。（後にテーブルを設置予定）





多目的ホール。座席の前後の間隔が広くとられ、ゆったりできる。また、収納可能な移動式階段座席を採用しており、国際会議後に同じ会場でレセプションを実施することもできる。

※COI（Center of Innovation）
企業や大学だけでは実現できない革新的なイノベーションを産学連携で実現するため、文部科学省が平成25年度から開始した「革新的イノベーション創出プログラム」。



「フード&メディカルイノベーション国際拠点」施設。未来を感じさせる外観デザインが特徴的。様々な研究施設が立ち並ぶ北キャンパスエリアに誕生した。

02 「大学の世界展開力強化事業」に採択

北海道大学は、文部科学省の平成26年度「大学の世界展開力強化事業〜ロシア、インド等との大学間交流形成支援〜」に採択されました。本学は〝日本の北に位置し、世界的には北極圏の南に位置する大学〟としての強みを活かし、ロシアを対象に「極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家育成プログラム（East Russia-Japan Expert Education Program）」を実施します。

「大学の世界展開力強化事業」は、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力、さらには海外とのネットワークを強化するため、高等教育の質の保証を図りながら日本人学生の海外留学と外国人学生の受け入れを行う国際教育連携の取り組みを支援する事業です。

本学は、極東ロシアの基幹5大学（極東連邦大学、北東連邦大学、イルクーツク国立大学、サハリン国立大学、太平洋国立大学）および自治体や産業界と協力して、地球規模の課題の集積地である極東・北極圏の持続的な発展を牽引する人材を育成するとともに、日露大学間の単位互換など質の保証を伴った教育交流プログラムを実施します。

3月には、日露の学生が一堂に会して分野横断的な講義を行う基礎科目が本学で試行的に実施され、ロシア側の学生・教員合わせて55名を受け入れました。今年の夏には、国内外のフィールド実習も加えた基礎科目が本格的にスタートします。



「RJE3基礎科目（試行）」講義の様子

春咲く「エルムの森」



撮影／山本顕史

春の訪れを早く感じることができた3月。キャンパスでは、合格発表、学位記授与式と、賑やかな行事が続きました。3月25日（水）に札幌キャンパス第一・第二体育館、翌26日（木）に函館市内のホテルで行われた学位記授与式では、学部生2484名、大学院生1938名が、清々しい表情で学び舎を後にしました。

そして、新たな始まりとなる4月からは、北キャンパスエリアに誕生した「フード&メディカルイノベーション国際拠点」が順次稼働します。拠点施設内には、産学官と市民の方々が気軽に交流できるスペースが随所にみられ、未来への広がりを感じられる空間です。ここから革新的な研究シーズが生まれ、育まれていきます。

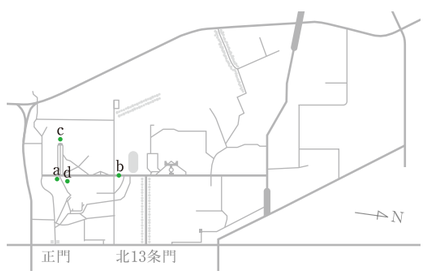
もうすぐ「エルムの森」にも、新緑の季節が到来します。


c


a


d


b



a・クラーク像
b・メインストリート
c・農学部
d・古河講堂